五色墨

或師の云利休は茶の湯をわびと
事はなれども其わびの
道具とも是を如何と新し
なれども用ひたく雲わびたる
利休義か無き新古共用ひか
わびたるこそわびと云はなれ
ばなり古摺物なれども所々

よりしく家の風を用ゐるまじき
ひとすぢのみちと存じて也
数寄をばむつましとおもひしにや
誹諧も此のごとし句をなさしむるハ
詞人なり誹諧をすてゝ和歌を読く
そこ和歌はよしとして読は長
是を風雅ならしむるにおいて見れ

せらるゝ所は本意なるまじくや
和哥の世つらしより諸の志あり
其折々時節を算して身流し
くらくたまる人無き和句なりとも
是用し哥為の事と人はかなく
句をとふあらく思工ことあらん人の
和句はいひしゆゑなるせんと無作

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宝音井其角述

右文章其角雑談集之取載而
角没二十五年俳道日盛但亡
作者用心者焉或以腹藁或餅
糟粕争點勝負以媚當日判者
無意甘雪月花其臨席前句未
唫了競唱自巳句以其取豫也
粤五子締交有年暇日慣新撰
六帖意輪為判者而加合點書

既成無意勝負互難陳以相娛
也爾之言寔可貴焉豈非斯道
之師哉讀之者其有取于此

點譜

褒章二十点 七字十五 五字十、 白兎園 宗瑞
三字七、朱五、長三、丸二、
花君子二十五点 龜巢二十、魚戲十七、 樽巷郎 蓮之
三字十、二字七、朱五、長三、丸二、
數露印面 長三、 拇隣 尺尺
崑山美五十八点 三圈十七、雙圈十、 綯堂 素丸
一圈七、朱五、長三、
六羨歌二十点 南零水十、臨岸水七、 鷗心亭 長水
朱五、長三、

名物き黄く桜よりも覚えの名　　長水

船虫も何も居ぬ戸ハり誰　　蓮之

猩々は手枕の上へ一けり明のとく　　此尺

奈良飼は癖と鉄せきまで　　素丸

しかりくと身は地に月の行居　　之

ほれは十銭のよき萩二十間　　尺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水戸様より大きなる御所様
正月ちかく御所様の御
山陵参詣 御供仕り
後伏見院より参る 雖
人数多御一所 御
参詣 同じ 岩うぐ
月和尚の縁 御
北条源井様 参詣

之
丸
五
天
之
丸
天
水

ゥ
高さ御さの御ちく人生 獅
宮ふまちの法師 様
御参詣の一日 十日 五 柄一うけ
公代 御離 御
船頭の忠仏 中一 花
糸 朝 觀 寺

丸
之
水
丸
之
尺

判者宗瑞

是五鳳樓手 二

聖護院 [illegible]

簾上珍 四

この春 むしの[illegible]

紫藤濃 ちる[illegible]

朱 五

ワキ 眉[illegible]

室梅の[illegible] 梅[illegible]

夕月夜

長 八

丸 四

古[illegible]遣子[illegible]更衣 宗瑞

[illegible]の中[illegible]小利口 咫尺

[illegible]村[illegible] 素丸

船場の[illegible] 長水

[illegible]治乃[illegible] 尺

[illegible]の[illegible] 丸

ウ

はつ〳〵と熱湯の底ゟ蕈茂る　水

中ゟ幔立るは信も無しに　端

後躬は被うらむる人の盞　丸

端折て居る地蔵経好　水

権の閣捲けて嫁ぐ継るはきまゝる　端

松るしよりて手を旅らん　尺

猶あり残はくまと切ましく川千鳥　丸

あれは紫の干る有る花は春似　友

墨すれて集も凪しゆの后路　尺

京御所絹ら簾衣井しも月　端

籠もしか女は豆腐よしむ世もるは巣　水

ナ経す経男律義千万　端

十

酒風は継す麓にてと継綱　端

神まし不懂林十つりまとく　丸

琴ネ二合へし原縛るは具四　水

壱元若仁元太宮有れは慮　端

貴杜丹なんと花にまされども
色香なきがごとくなれば
育子の好まぬ花なり
御り大工なる恋の世うつり
家宝なる色種なる誰なれば
繁さ一茶も千しく咲間
極男なる一重なれば富貴
なるよりは御大

尺
水
丸
尺
端
丸
石
端

ウ
緑なる木の根うるはしく
極字なる間一なる入寄なれ
位なる一鶯なる力なる
枝なる家来なるすぐ鳴なる
いなる鶯なる花のなるなる
志なるなる清なる奥屋

丸
尺
端
水
尺
丸

判者蓮之

魚戯一

熟柿の落る　十里香二

泊る上　青銭四

海鼠　雑うみ

すゝよ　栗の戸

朱七　秋の素

蕎句　四句目　川千鳥

鄙ちかん　育子　ものくるの宮

花ちり　長九　九六

蕭々不形見えて居る蛙　蓮之

沈井に魚の一尾　素丸

門の月天に有る鉦　長水

さゝとく行る蛙の中より　宗瑞

笑つゝ立寄る蔦の陰　丸

初雁に魚を鵜に印う形　水

古塚より孫の傳をこゝ聚所にて
何月何日より編と云る
紙數七の色葉にて作る
文章揚句を揚句に
拙集十小柄を失ふ
久一物語ゆく鏡新にあり
俳諸の月一樂しに仲
永徳にて花の老気毎

瑞之水瑞之丸瑞之水瑞之丸

俳諸ゆくと云ふ物語
はつぐ〳〵に紙に編
金言の月に一仲作の月
ゆく文矢くり半藁へる内
窓毎に表に八重子
わ月う紙に お雑紙
表に一紙に月表に
仲菊能に通る署に日

瑞之水瑞之丸瑞之水瑞之

思ひやりし肩にかけたる紐　丸
弓師の郡(ミセ)り居る大倉　之
龍人出の着てまちての岩　水
狂言の花を藤屋しくる　丸
稲舟の田舎[illegible]出[illegible]手紙振り　之
根の辻一條里近く　端
身[illegible]花[illegible]月の影　丸
花野[illegible]中[illegible]紫[illegible]り　之

ウ
本海寺[illegible]いつ見[illegible]定[illegible]萱(カヤ)の新　水
む[illegible]擬る鳥[illegible]しの笠　端
石擬[illegible]の字[illegible]し色襷(タスキ)　丸
登康乃毒[illegible]山[illegible]の屏　之
雛(アヤニツ)く宿し宿花の藤(フヒト)野　端
鞍[illegible]く柔嶋手拭　水

判者原尺

十五吳姬蔓下垂一　七の子菓子　雪弘友

十丈蓬一　八重子　山水

右塚子

七重車四

卜キ

法菊義弓

五湖隊四

雅子弘市

弓師

長十二

名月中秋の節句弘人通り　原尺

命と存うず　桃野乃紋　長水

隙の間弘倒り刀先ぶく　宗瑞

弱蓬野うち月弘命ぶり　蓮之

索新と上ぶく　水仙の者　水

格子塚る面弘面作ぶく　瑞

ウ
本妻はまさ出しと騙りの怨け来　之

宿の緋紗子の綾は涼しさ　天

紅やさき扇もつの緋紹様の新　瑞

家らしは気を見る物の袖　水

賞場もの名まくて結ぶ蒲萄摘　天

佛ましむは塔は涼しさ　之

江戸流は背中くえる絶肩　瑞

かつけさ恋も今は役人　天

秋らしは嫁の歌に嫁の後　水

言葉訛りて尊は恋敬　瑞

ものにに椀も碗山三月は月　之

雛抱く家は古は町内　名

十
小息子はうても秘めく穴の鞄　天

菊わさ解る川井は鰀　之

年はまさまらの二ひに飯三度　水

高話うらげる法は場人　瑞

[illegible]之
[illegible]尺
[illegible]揚
[illegible]水
[illegible]尺
[illegible]之
[illegible]尺

[illegible]之
[illegible]揚
[illegible]尺
[illegible]水
[illegible]揚
[illegible]之

判者素丸

三圈一

双圈一

一圈四

朱七

長八

素丸

宗瑞

蓮之

素丸

宗瑞

蓮之

ゥ

之孫宮ゝ古ゝ而為る仏者老
道三郎ゝ〜て為る所為なれども
五月雨に金石も傾く為る事
すること十二ゆくゝ之の弘
おそれ山曲輪て河豚を喰ふ
正別当に命ぜ孫ゆ
焦ゝ為ること之の為ゝ老院
道世間て為ひなるゝ

尺
凡
稱
尺
之
凡
尺
稱

本力の為ゝ仏山の別くんど
武士大候ゝうに老子月
ゝ為ること社為ゝ所
庵ゝ井ゝ弘ゝ弘ゝよく為る
ナ
ゝ実ゝ友ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
信度鎌ゝ宮ゝ為ゝ為ゝ
ゝ為ゝ為ゝ為ゝ為ゝ
蛇ゝ一ゝ寺ゝ為ゝ

尺
之
稱
尺
之
稱
凡
之

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

判者長水

南零水 一

寺の小洞南 臨岸水 三

ゆふ月 井手

あか中 朱四

芽三 はしまれ

かねの緑 手習孫付

長八

今は世の誹諧者あまたありてよく此
道を好みてわれもわれもとすゝめし
業を點する人多かれと誹諧の道にかなふ
ものはまれ也一二年さへ上手とよばるゝ
身さへ心なし又四道に一つも
その人もしらずたゞものまねに
されば一花好る作者も能居る比なし
せめて満足おほく又なく識るまえ
とく一句一字さへおろそかならず
誠の心得をうしなはぬことみのる

世月にとる此一集をこれ久しく紙衣
のうちにかくせる杯と思ふ蓑笠は
やつれ旅寝は作の下にかくれつ人を
死句活句のとゞまり光陰迅速をしまた煙
より出て気をつかふきみあたれは
わらしならしてうけをの開かる是
實のうちにして虚虚のうちに實をしおなる處ハ
一般清意は嫁なるべし

玉笥山人述

発句

うら寂し十六夜さんより折　敬雨
柳は猿より猿人乃猿　長水
川風は添ひ立つ狗と柳ゆく　宗瑞
鶏狗る顔は寿比え　蓮之
涌子のなまり撥ねる船の月　素凡
まちつるかくて嘉は先生　欣尺

ウ

夏の月氷箱涼所は暖簾哉 氷

嵐すき蘭に似たける撥 雨

忠敬めくしまく云事おす 之

種河あへきと八新気飯 猫

薔薇咲く白蓮湖のくき縄薮 天

夕顔も寢ては晴るも空 風

結つけく露く吹く石鹼にて吹くそ 雨

二日三日は抱き寄は月 氷

風の玉花暖は一醉橘の素 猫

竹ゝく翁ゝ露は山枕 之

流星の吉妻に淋し造了也 天

縦秋のる秋気ゆく事 風

十

東西宸巨難の例ハ吾つゝ江 之

天下泰平穀つゝ〳〵强 天

成天箱縫く奴の扇のやうにく 氷

綵の手子と蕣纏無袖 雨

此寺さ有る桜花深うも
ちるを師摩(シマ)に集くよん花
有くと山を彩樹(ミヤ)の位を能
男の琴(コト)に洋(ヒク)ものを扣
一枝の緑枝也んて咲るを人
恵を稱を法の尖
光輝を陸さを絶を稜
稱第に出る古の山

月
稱
天
水
西
月
稱
之

ウ
扇(オウギ)を振(フル)を舞(マイ)
ちるの春ぞ夜の時雨
ちるを春ぞ命を七つ能
二能所根を
手折んと贈女仲言の信
去程五人一人ず称

月
西
水
稱
之
尺

享保十六年
辛亥菊炑
下拝原同明町
彫工　芳澤彦七

書肆
江戸日本橋通二町目
戸倉屋喜兵衛